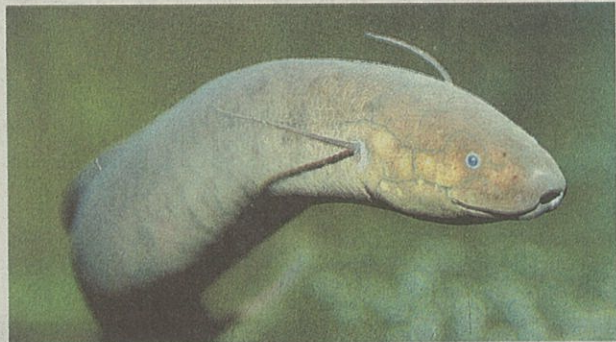
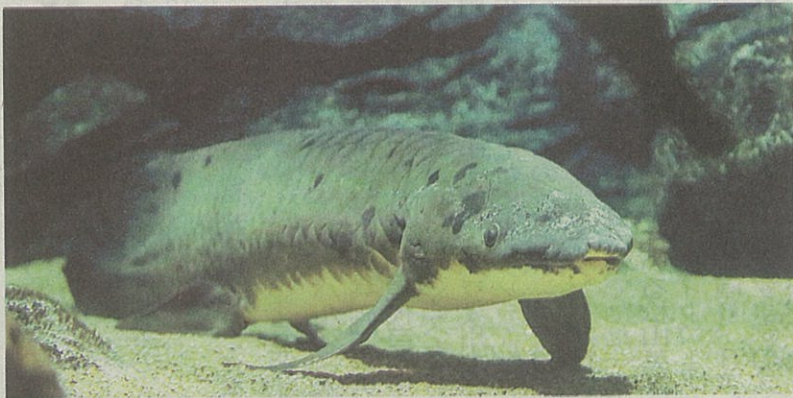


須磨海浜水族園 亀ちゃんの あっぱれ! 水の動物たち



①オーストラリアのネオセラトダス・フォルステリ②南米に生息するレピドシレン・パドクサ

4億年生き残ったハイギョ

大陸移動説の証人

神戸市立須磨海浜水族園には約400種の魚がいる。魚にもいろいろあるが、軟骨魚類と、硬骨魚類の条鰭類、肉鰭類という二つのグループに大別することができる。軟骨魚類とはサメやエイの仲間、骨は柔らかい軟骨でできているし、繁殖の仕方、浸透圧の調整の仕方、他の魚とまるで違う。条鰭類とは膜状のヒレを持った魚で、魚屋で通常売っている魚はすべてこの仲間に含まれる。

世界中にハイギョは6種、シラカンスは2種がいる。「生き残っている」と書いたのは、この魚が栄えたのは4億年ほど昔の古生代であり、その頃はもっと多くの種がいたからである。

さて、現在、陸上で闊歩している四足を持つ動物の祖先は魚だということをご存じであろう。しかも、この肉鰭類の仲間から両生類が誕生したことは間違いない。では、両生類の祖先はハイギョとシラカンスのどちらに近いのかというと、諸説があるらしいのだが、肺があるところ

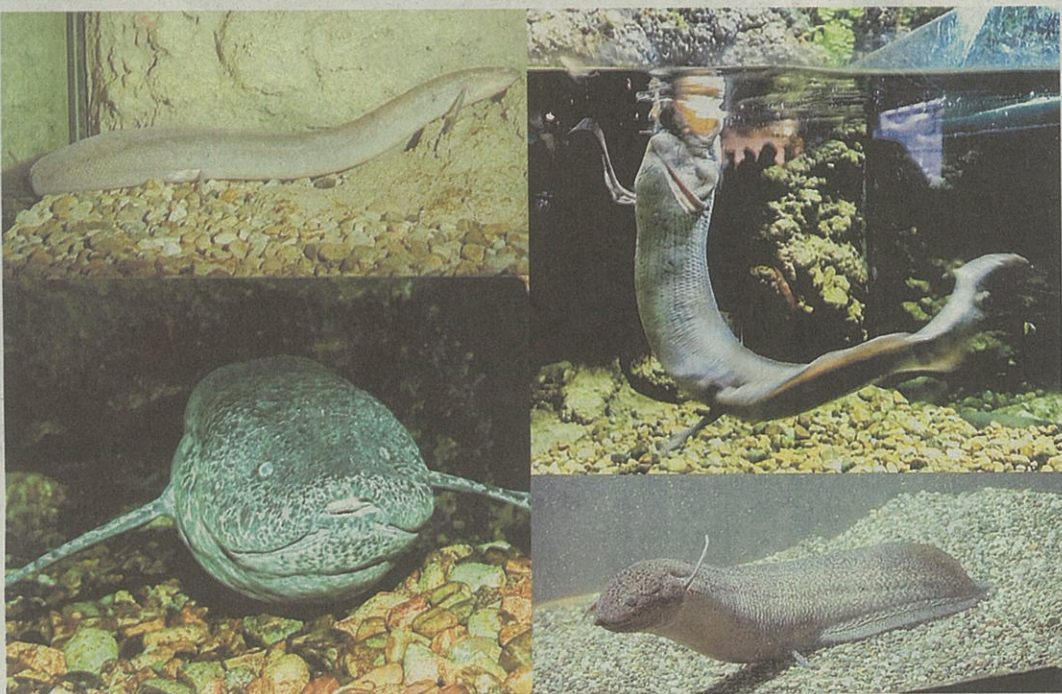
アンテナのようなヒレがくっついていただけ。色もみな同じで黒い。よく似た魚を並べても意味ないというのにも理にかなっている。しかしである。アフリカと南米とオーストラリアによく似た魚がいて、それが我々と同じように肺で呼吸をしているのである。もっと慈しみ敬意を持ってほしいのではない。しかも、アフリカ・南米・オーストラリアに似た魚がいるのには理由がある。4億年前にはその三つの大陸はつながっていた。その頃の地球には Gondwana 大陸と Laurasia 大陸という二つの大きな陸地があった。Gondwana の方が五つに割れて、アフリカ、南米、インド、オーストラリア、南極に、Laurasia の方はアジアと北米となった。Gondwana にいたハイギョがそのままアフリカと南米とオーストラリアに生き残っているのだ。まさに大陸移動説の生き証人なのだ。

を重視するとハイギョの方が近いと考えられる。遺伝子もそれを支持している。

須磨海浜水族園は世界に生息するハイギョ6種のすべてが自慢だ。そう思い込んで、担当のSに確認をとった。Sはあっさり「6種? いません。5種です。アフリカのアンフィピウスが死んだんで……」。アンフィピウスというのはプロトプテルス・アンフィピウスのこと、アフリカに生息するハイギョの学名である。ハイギョはアフリカに4種、南米に1種、オーストラリアに1種生息するが、アフリカの1種がいらないらしい。

私は思わずネットで「アンフィピウス 販売」と入力し検索した。すると売っていた。3万円に2万円。ひどい。この進化の申し子たちがこの価格。ネット社会はこの生物学上の貴重さを軽視し、いとも簡単に値札をつけてしまう。そう思いながらも、私は安堵し、Sに購入を命じたのであった。「プロトプテルス・アンフィピウス、入手しとけや」

次回2月7日



アフリカに生息するハイギョ（プロトプテルス属）4種。（左上から時計回りに）プロトプテルス・ドロイマ水面に上がって空気を吸うアネクテンス・今はいないアンフィピウス・エチオピクス

「それは残念、何とか手に入れたらどうやねん」と私。それに対し、Sは「今、現場では5種も展示する必要はない。減らそうかという話も出てくるんですよ」との返答。私は「けしからん」と内心思ったが、Sは「オーストラリアのやつを除くと、他はよく似ていますからね」と続けた。確かに、オーストラリアにいる1種以外の5種は似ている。ウナギとナマズの間のような細長い体に、細い



亀崎直樹（かめざき・なおき）1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園学術研究統括。元園長。岡山理科大学生物地球学部教授。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。